2026年に訪れる「コロナ禍の新展開」...変異株「XFG」の脅威と、今こそ知っておきたい重症化リスク 12/24 ニュースウイーク

「緊急事態」ではなくなったが、コロナウイルスの脅威は消えていないようだ

緊急事態ではなくなったものの、コロナの脅威は消えるわけではない。 Dagmara_K-shutterstock

2020年に世界保健機関（WHO）が新型コロナウイルスをパンデミックと宣言してから、まもなく6年が経過する。

現在では緊急事態とはみなされていないが、依然として病弱な人々を重篤な状態に陥らせる可能性がある。

例えば、アメリカでは現在、冬季に典型的な傾向としてウイルスの感染が増加している。

本誌は、2026年にコロナウイルスがどのように変化するのか、注意すべき症状は何か、そしてこのウイルスを懸念すべきなのかについて、専門家に話を聞いた。

コロナウイルスに感染しても軽症で済む人がいる一方で、より重篤な症状を呈し、入院、さらには死亡に至る場合もある。

また、感染後に後遺症を発症する人もいる。例えば現在、アメリカの子どもたちの間で、最も一般的な慢性疾患の1つとなっている。

米国疾病対策センター（CDC）は以前、2024年10月1日から2025年9月27日までの間に、コロナウイルスの患者数が1410万人から2070万人、入院者数が39万人から55万人、死亡者数が4万5000人から6万4000人に上ると推計していた。2024年6月1日時点で、アメリカでは約120万人がコロナウイルスにより死亡してい

2026年にはどの変異株や症状が見られる？

コロナウイルスには20種類以上とも言われる多くの変異株が存在する。しかし、専門家は2026年もオミクロン株系統が主に流行すると考えている。

「現在流行しているコロナウイルスの変異株はすべて、数年前から存在するオミクロン株に属する」と、米バンダービルト大学医療センターの予防医学および内科学教授であるウィリアム・シャフナー医師は本誌に語った。
米ニューヨーク州立バッファロー校の感染症部門主任で教授のトーマス・ルッソ医師は本誌に対し、オミクロン系統から派生した最新の変異株は、XFG やストラタスと呼ばれていると述べた。
「先行する株よりも免疫回避能力が高いようだ。過去の感染やワクチン接種による免疫が不完全であったため優勢になった」
そのため、現在は XFG が「感染拡大している」が、「新たな変異株が出現する時期が来ている」とも指摘した。ただし、その時期は不確実であるという。
CDC によれば、コロナウイルスには発熱、悪寒、咳、息切れ、鼻づまり、喉の痛み、味覚や嗅覚の喪失、倦怠感、体の痛み、頭痛など、非常に幅広い症状を引き起こし得る。
2026 年でも症状は引き続き同様である可能性が高い。ルッソも「喉の痛みや軽い風邪のような症状から、宿主の状態によっては重篤な疾患や死亡に至るまで幅がある」と述べている。
4 歳未満の子ども、妊婦、65 歳以上の高齢者、免疫不全の人、基礎疾患を有する人は、「重症化するなど、深刻な結果に至る可能性が高い」と付け加えた

2026 年に感染者数は増加する？

シャフナーは、現在のコロナウイルスは「この冬も多くの場合は軽症を引き起こすが、同時に重症例も引き起こし続ける」との見方を示した。すでにコロナによる入院患者数が「増加傾向」にあり、これは予想されていた冬季の流行開始を示しているという。
現時点では、コロナウイルスは「オミクロン系統の中で着実に変異を続けている」とシャフナーは述べた。「幸いなことに、ここ数年、国際的な舞台で劇的に新しい変異株は出現していない」
一方、ルッソは、いずれの時点か、もしかするとこの冬にも、「XFG よりも感染力が強い、あるいは既存の免疫をより巧みに回避する、もしくはその両方を兼ね備えた新たな変異株が出現する」と考えていると述べた。
ウイルスの変異に加え、ワクチン接種はコロナによる入院率にも影響を及ぼす。シャフナーは、現在の入院患者数増加に関連して、「入院している患者のほぼ全員が、コロナワクチンの接種が最新の状態ではない」と述べた。
「(コロナワクチンは) 重症化を防ぐ効果を今なお有しているが、残念ながら十分に利用されていない」

2026 年はコロナを懸念すべき？

シャフナーは、「コロナという疾患の深刻さを認識し、敬意をもって向き合ってほしい」と述べた。特に、高齢者や慢性疾患を持つ人、免疫不全の人、妊婦は、「できるだけ早くワクチンを接種することを勧める」と付け加えた。
ルッソも「コロナに対して油断してはならない」と警告した。コロナウイルスは依然、「特に高リスクの人々にとって致命的となり得る病気」だという。
加えて、ルッソは後遺症を発症するリスクを指摘する。「(後遺症は) 誰にでも起こり得る。重症化リスクが低い若く健康な人々にとっても、特に注意すべきだ」

これらのリスクを最小限に抑える最善の方法について、ルッソは「最低でも年１回ワクチン接種を受けること」であり、「選ばれた高リスクの人々は年２回の接種が有益な場合もある」とも述べた。そして、「コロナワクチンは感染予防という点では完全ではない。しかし、入院や死亡の可能性を低下させる効果は非常に高い」とワクチンの有用性を強調した。

「最近のデータを見ると、コロナウイルスの感染者数が再び増加している可能性もある.....自分自身と大切な人を守るため、今こそワクチンを接種する時期だ」

ジャスミン・ローズ